

「サウンドスケープとその計画論への展開」

共同研究グループ代表者

中村 隆一

都市環境における音のあり方を考えていくための方法としてサウンドスケープ（音環境）の概念が注目されている。サウンドスケープ概念は、音を、騒音制御の観点から数量的にあつかうのではなく、文化的あるいは社会的分脈との関連においてとらえる。それは、音の出自や個性を知ることであり、同時に環境と人間の関わり方までもふくむ広い射程をもっている。こうしたことは従来の騒音制御の発想にはなかったものである。

いま、感性を重視したまちづくりの必要性が強く認識されるようになっている。音環境は視覚環境と並んで都市環境の構成要素の重要なものである。しかしながら、景観評価が土木計画のなかで一応の地歩をしめているにもかかわらず、音環境に関しての計画論は騒音防止という観点を除いては全く成立していないのが現状である。

本共同研究グループはこのような状況を踏まえて、サウンドスケープ概念の、計画論への展開方策について議論してきた。議論の進め方としては、サウンドスケープ概念がまだ若く、一般の理解も不十分で言葉だけが先行しているきらいもあることから、まず、その思想的あるいは学問的背景についての議論と類似概念である景観評価との比較を行い、その後サウンドスケープ概念の具体化（計画化）についての議論を行った。「計画論」という言葉のとらえ方については、土木計画にとどまらず、行政計画および社会計画の意味も持たせている。

今年度の議論の取りまとめの方向については以下のように考えている。

- (1)サウンドスケープ概念の思想的学問的背景について
- (2)景観評価との比較検討
- (3)サウンドスケープ概念と計画論
 - ①音感性を重視した空間設計の考え方
 - ②公園・イベント空間での音環境設計の考え方
 - ③都市施設の音環境設計の考え方
 - ④音の環境教育と社会計画
 - ⑤騒音行政、アメニティ行政とのかかわり

- (4)社会学的立場から見たサウンドスケープの可能性について

次年度以降は、サウンドスケープ概念の、学問性、計画理念、社会規範としての可能性についての議論を深めながら、さらに具体的なレベルで計画への適用可能性を追求して行きたいと考えている。

なお本共同研究グループは当初20数名で出発したが、討論参加者を加えると現在40名を超える世帯になっている。意識するか否かにかかわらず、すべての人が「音」に関わって生活や活動を行っている。良い音環境を実現することは万人の望むところであるし、また、多数の理解がなければ良い音環境は得られない。サウンドスケープにご興味ある多くの方々のご参加を希望します。